

## パウル・クレーのプリミティブ

石野 眞

---

### Makoto ISHINO A Study of "Paul Klee's Primitive"

---

〔キーワード：パウル・クレー Paul Klee, バウハウス Bauhaus, アレキサンダー・クレー Alexander Klee, クレー・プリミティブ Paul Klee's Primitive, 浜田市世界こども美術館 Hamada Children's Museum of Art〕

#### I. はじめに

パウル・クレーは音楽性を豊かに感じさせる色彩あふれる画面とメルヘンの世界に誘いかける繊細な響き、線描や記号の絵画として、ひろく知られるスイスの芸術家そしてドイツ・バウハウスの教授、美術教育者でした。本稿は、浜田市世界こども美術館創作活動館の開館ならびに開館記念展『こどもたちのパウル・クレー展』の意義について述べるとともに同展に寄せてアレキサンダー・クレー氏が祖父パウル・クレーの造形表現について述べた講演に基づいて、パウル・クレーの造形思考と造形表現にある「プリミティブ」について研究する。

パウル・クレーは、音楽によって結ばれた母と音楽教師の父を両親として、幼い頃から音楽に親しみ、少年時代にベルン室内楽団のバイオリニストとして活躍するほどの音楽的な才能に恵まれ、ドイツ文学に親しみ感銘して詩を書きながらも、美術の道を志そうとして惑う青年期の悩みは良く知られている。ミュンヘンの美術学校に学び、ピアニストのリリーシュトゥンプを妻としてクレーの生活はいつも音楽に満ち溢れていた。パウル・クレーの表現世界にはそうした繊細で響きの豊かな線描と調和する色彩のひろがりという画面に、音楽性豊かな響きと美しい色彩の調和が感じられる。

#### II. 浜田市世界こども美術館の開館記念展

##### 『こどもたちのパウル・クレー展』

パウル・クレーの展覧会では、いつも自己に忠実な画

家パウル・クレー、美術教育者パウル・クレーを一つの姿として見ながら、見るたびに、いままで知らなかった表現世界が見えて来るとともに深い感動を覚える。まさに制作信条としてパウル・クレーがめざした「見えないものを見えるようにすること」を実感する。

谷川俊太郎氏の詩による「クレーの絵本」にみられるように、パウル・クレー展では、せまってくる多彩な表現の感動とパウル・クレーの人間性の魅力を鑑賞する幸せに包まれて、その醍醐味にひることが出来る。

近年の大きなパウル・クレー展だけでも、1980年の生誕100年記念パウル・クレー展（東京・西武美術館）、1985年のパウル・クレー展（姫路市立美術館・宮城県立美術館・神奈川県立近代美術館・滋賀県立近代美術館・新潟市立美術館を巡回）、1989年の没後50年記念パウル・クレー展（東京・伊勢丹美術館、大阪・ナビオ美術館）、1993年のパウル・クレーの芸術展（名古屋・愛知県立美術館、山口県立美術館、東京・Bunkamuraザ・ミュージアム）、1995年のクレー家秘蔵のパウル・クレー展（金沢・石川県立美術館、東京・大丸ミュージアム、高知県立美術館、京都・大丸ミュージアム・KYOTO、笠間日動美術館、浜松市美術館、大丸ミュージアム・梅田）と続いている。

昨秋、マルチメディアフェアの開催に際して前日より滞在していた私は、JR浜田駅前から石見交通のバスに乗って県立国際短期大学のキャンパスへ向かった。バスを降りると現在は東京芸術大学学長の澄川喜一教授の制作された高い石のモニュメントの向こうに建築家・高松伸の設計になる浜田市世界こども美術館が銀色に輝いている。

平成8年11月1日、浜田市世界こども美術館創作活動館開館記念式典は、澄田信義島根県知事、宇津徹男浜田市長、スイスから、パウル・クレーの孫アレキサンダー・クレー氏並びにシュテファン・フライ元スイス・ベルン美術館学芸員そして多数の地元関係者の列席のもとに行われた。

開館記念展『こどもたちのパウル・クレー展』のクレー一家の貴重な家族コレクションは、スイス大使イエヌーC.A.シュテリヘンが作品集で紹介しているように、現在残っているクレーの絵の中で一番古いもののひとつである『屋根の上のコウノトリの巣』をはじめとして9歳、最初のスケッチブックから少年期のギムナジウム時代、青年期から晩年の代表作までの展示作品のほとんどが、まさにクレー家の愛のうちに本邦初公開という素晴らしい展覧会であった。

### III. アレクサンダー・クレー氏の祝辞

浜田市世界こども美術館創作活動館開館記念式典に際して、パウル・クレーの孫のアレクサンダー・クレー氏のお祝いの挨拶は、クレーの作品とこどもの美術の関わりを解きあかしながら、パウル・クレーのプリミティブについて語り、美術教育の成果を讃えて、日本の美術教育史に残る素晴らしいものであった。

貴重な美術教育研究とパウル・クレーの創作活動の秘密を探るパウル・クレー研究の資料として以下にその全文を紹介する。

#### アレクサンダー・クレー氏の開会式祝辞

ご来場の皆様、本日、この場において、皆様とともに『浜田市世界こども美術館』の開館を祝うことができますことは、私にとって大きな喜びであり、また名誉なことでもあります。さらに、名誉ある開館に際して、私の祖父パウル・クレーの展覧会が開催出来ますことは、クレーの家族の一員として、またパウル・クレー財団の代表者として誇りとするところであり、浜田市長・宇津徹男様をはじめ関係各位に心からお祝いを申し上げます。

人間文化の始まりには、まず『記号』が出現しましたそれは音声であり、絵でした。最初の記号は最初の絵であり、最初の芸術作品でもあったわけです。それから人類は、音声であり絵であったものをさらに発展させて、文字やことば、即ち『言語』を創出してきました。最初の記号から言語表現へ、それは人間にとって実に長い道のりでしたが、それによって私達は『様式』(これは芸術作品にとって最も基本的なことのひとつですが)を作り上げ、様々な文化段階での思考を可能にしました。最初

の象形文字からレオナルド・ダ・ヴィンチへの道のりです。ところで私は、私自身も芸術家として今日の日本や中国で使われている文字に大変興味もっています。そして、日本の近代の文化で言えば、5・7・5のたった17音のことばによって世界を捕らえてしまう芭蕉のような優れた芸術家に、またその様式に驚嘆せざるを得ないのであります。

子供というのは、いま申し上げた最初の記号から言語認識への段階を、この世に生を享うけたのち、極めて短い期間に習得します。幼児は自分の回りの世界、最初の社会認識といったものを絵で示し、その後、家族や学校、その子の才能や効率的な教育というものによって発展を遂げ、そのうちの何人かは芸術家となって美術史に名を記すこととなります。



アレクサンダー・クレー氏

パウル・クレーは、そうした発展段階の子供の絵のプリミティブ性(初原性)に大変興味を示し、自身の作品にもそれが見られます。そして、特に、クレーの晩年の作品においては、子供が描いたような単純な描線と、そこに付けられた詩的で思慮深い題名、即ち人類の最初の記号による表現と、亡命や死に対峙した自分の運命を受け入れる非常に理知的な表現の、二重の意味を、言わば表現文化の始まりをと何光年も隔てた未来とをその芸術創作に同時に見ることができるのです。

子供の絵の、『自由な』発展の重要性は、この展覧会をご覧になればよくお解かりになると存じます。シュテファン・フライとシンドウ・マコト両氏によって作られた本展は、そのことを大変よく示しています。パウル・クレーは、確かにある種の『才能』の持ち主でした。しかし同時に、クレーはその才能を発展させる『機会』にも恵まれたのです。私は、この『浜田市世界こども美術館』が、子供たちにそのような機会を与え得る美術館であることを願って止みません。

この祝辞を聴きながら、私は、いま誕生したばかりの浜田市世界こども美術館から未来のパウル・クレーが誕

生するような気持ちでいっぱいであった。おさなき日に良い作品にふれて感動することは、美術家としての成長を願うものだけでなく、全ての人にとって、あらゆる人間形成の礎を持つこととなる。

#### IV. パウル・クレーのプリミティブ

パウル・クレーのかたち、パウル・クレーのいろ、パウル・クレーの線などパウル・クレーの様々な表現について語られるように、多くの人々が、パウル・クレーの表現についてそのプリミティブ性に注目している。

アレクサンダー・クレー氏もパウル・クレーの発展段階における子供の絵のプリミティブ性(初原性)に大変興味を示し、彼自身の作品にもそれが見られることを語っている。人間文化の始まりには、まず『記号』が出現し、それは音声であり、絵で、最初の記号は最初の絵であり、最初の芸術作品でもあったことを指摘しながら「子供は、最初の記号から言語認識への段階を、この世に生をうけたのち、極めて短い期間に習得します。幼児は自分のまわりの世界、最初の社会認識といったものを絵で示し、その後、家族や学校、その子の才能や教育によって発展を遂げる。特に、クレーの晩年の作品においては、子供が描いたような単純な描線と、そこに付けられた詩的で思慮深い題名、即ち人類の最初の記号による表現と、亡命や死に対峙した自分の運命を受け入れる非常に理知的な表現の、二重の意味を、言わば表現文化の始まりと何光年も隔てた未来とを、その芸術創作において同時に見ることができる」と指摘している。

本稿では、これをパウル・クレーの表現の根幹を形成している概念として「クレー・プリミティブ」として考察する。

「クレー・プリミティブ」は” Paul Klee’s Primitive”である。

「子どものためのパウル・クレー展」作品集「子どもの領分」におけるパウル・クレー12歳のときの作品7「リンドウとシクラメン」、作品8「ジルバーヴルツとシャクナゲ」と作品29「花風車」46歳および作品34「共生—植物などの」54歳、などに「クレー・プリミティブ」を見ることが出来る。

美術史家で元スイス・ベルン美術館学芸員のパウル・クレー研究者シュテファン・フライ氏、パウル・クレーの孫のアレクサンダー・クレー氏、そしてパウル・クレー自身も次のようにプリミティブについて語り、記している。

「20世紀の画家をみても、幼年時代の素描作品を何十

年間も見つづけ、そこから自分の造形的創作や理論的思考、教育的活動のためのさまざまな糧をひきだした画家は、クレーをおいてほかに見あたらない」

—シュテファン・フライ「子どもの領分」—パウル・クレーの幼年期と少年期、そして彼の芸術作品に与えた影響について 同63頁。

「1911年と12年に、クレーは、ミュンヘンの前衛を代表する中心的な二人の画家フランツ・マルクとヴァシリー・カンディンスキーと知り合い、彼らとの交流を通じて現代芸術家の集団「青騎士」に近づくことになる。この仲間達の内輪では、子供の線描画や民衆芸術、あるいは未開民族の芸術の重要性をめぐって、そうしたものが現代的な芸術の基点となっていると議論されることがあった。この主張にクレーも一ますます深く一取り組むようになる。すでに1911年初頭には、自分の芸術の起源を探しとめて遡行し、自己の発展の歩みを明らかにしようとして努めている。彼は幼少年期以来制作してきた、芸術的な創作と呼べるものすべてに関する目録の作成を計画する。彼はこの目録を途切れることなく、1940年に亡くなるまで綿密詳細に記載し続ける」同上、70~71頁

パウル・クレー自身その日記のなかで、自分の子供のときからの作品の正確な総目録を作成することを自身の制作と表現にとってきわめて大切な事に気づいている。

パウル・クレーの日記

890 2月。手許に残っている作品の正確な総目録を作る。281頁

1911早春/282頁

895 略、自分の子供のときからの作品の正確な総目録を作成したのだ。ただ学校で描いた図画とか裸体画など、創造的な自主性に欠けているものは、省略した。

1912年/292頁

905 ミュンヘンからスイスに出した公開の書簡。略。この根源的な芸術は、子供でも出来ることなのです。そしてまさに子供でも出来るということに、叡智がひそんでいるのだ。子供は、大人がよけいな手を出さなければ、それだけすばらしい絵を描いて見せるのです。だから子供の天分がそこなわれないように、幼いうちから注意しなければならぬ。

パウル・クレーの最初の記号は最初の絵であり、最初の芸術作品として造形言語により語られた表現である。

作品36「動物たちが会おう」など晩年の記号的な表現の多くに見られる幼少年期の思い出やスケッチが重なって素朴な表現に精緻な感性が響いて見える。パウル・ク

レーの全ての表現世界に広がっている「プリミティブなもの」と作品と記述との検証をここにはじめたが、多くの事例を継続研究に委ねたい。

## V. ベルン美術館のパウル・クレー研究

美術史家で元スイス・ベルン美術館学芸員のシュテファン・フライ氏とパウル・クレー研究をともにしながら浜田市でお会いできたことをよこび、再びまたクレーの地、ベルンであいましようという約束を持つことが出来た。ベルンを訪ね、クレー家を訪問出来る楽しみを持たれたことを感謝している。

ベルンのパウル・クレー財団とベルン美術館では、デジタルアーカイブの時代にあって、水彩や鉛筆による紙の作品が多くて劣化が進みやすい作品の多いなかで、クレーの全作品1万点の作品目録と作品のデジタル収録が精力的に進められている。

私のパウル・クレー研究は、1977年～78年の1年間文部省在外研究員、スイス国立ペスタロッチ教育研究所客員研究員としてチューリヒに滞在、その1978年の秋2ヶ月をベルン美術館客員研究員としてのアール河のほとりのベルン美術館に滞在、地下に広がる資料室と収蔵庫、ベルン大学の美学・美術史の講義も行われる図書館にクレーノートを読み、パウル・クレーの作品を研究した。ユルグ・グレーゼマーの研究に続く、ユルグ・シュピラー氏の研究のもとにクレーノートの中に創作表現の秘密を訊ね、作品の表現世界にどっぷりと浸る毎日であった。パウル・クレーの絵画表現は、このバウハウスにおける講義手稿・美術教育ノートによって深く理解し、鑑賞することが出来る。

パウル・クレーはバウハウスにおいて学生に講義し、自らの作品を描いた。その講義ノートはまさにパウル・クレーの創作活動の秘密を解き明かしている。美術教育者パウル・クレーは新しい時代の新しい美術教育、体系的な美術教育原理としての造形言語と造形文法、造形思考に基づく魅力溢れる造形表現の完成をめざしていた。パウル・クレーの表現世界はまさに、色と形と素材を言葉として造形思考し、造形文法によって組み立てられた造形表現である。

## VI. おわりに

浜田市世界こども美術館学芸員諸氏の努力で、見る楽しさと理解を深めるために、我が国のクレー展初めてのワーキングシートが製作され、鑑賞を支援した。

展覧会の作品集「子どもの領分」における新藤信氏の作品解説はこどもに向けたパウル・クレー作品の解説としてはおそらく日本で最初のものとして、きわめて優れた内容である。

また巻末には、「それは子どもにもできる。子どもにもできるということにこそ叡知がひそんでいるのだ。」と題して、—パウル・クレーの幼年期と少年期、そして彼の芸術作品に与えた影響について書かれたシュテファン・フライ氏の論文（後藤文子・訳）がある。

美術史家で元スイス・ベルン美術館学芸員のシュテファン・フライ氏の論文は、家庭におけるこどもの作品の見方や取り扱いと美術教育のありかたに示唆をあたえている貴重な論文である。

パウル・クレー研究のために、浜田市世界こども美術館の御好意より、開館式当日のパウル・クレーの孫のアレクサンダー・クレー氏の挨拶文（英文・翻訳の日本語文）コピーを常務理事の日野原克麿氏より貴重な資料として送付いただいたことを感謝している。

浜田市世界こども美術館の建設、開館記念展『こどもたちのパウル・クレー展』の開催と作品集「子どもの領分」の刊行という日本の美術教育史に残る素晴らしい出来事を推進された浜田市をはじめ多くの関係者を讃え、パウル・クレー研究の広がり感謝している。

## 註

\* 作品番号は、開館記念展『こどもたちのパウル・クレー展』—子供の領分・アレクサンダー・クレー監修/作品集の作品リスト番号による。

\* 前研究の「パウル・クレーの造形思考II」に誤りがありました。英文タイトルを下記のとおり訂正します。  
A Study of Paul Klee's "Pädagogischer Nachlass" 誤  
A Study of Paul Klee's "Pädagogischer Nächlass" 正

## 参考文献および資料等

- \* 「クレーの日記」南原実訳、新潮社、1961。  
gebücher von Paul Klee 1898-1918, Herausgegeben und eingeleitet von Felix Klee,  
Verlag M.DuMont Schauberg Köln, 1757
- \* 『子どものためのパウル・クレー展』浜田市世界こども美術館  
「子供の領分」監修アレクサンダー・クレー・編集日本パウル・クレー協会・発行浜田市世界こども美術館  
制作・印象社、1996

- \* 『子どものためのパウル・クレー展』ニューオオタニ  
美術館展
- \* 「クレーの絵本」谷川俊太郎・1995年、講談社刊
- \* 「こどもたちのためのパウル・クレー展」に寄せて  
山陰中央新報／平成9年1月8日